

こんなにも感覚が違うなんて知らなかった。生々しく、いやらしく蠢くその感触がたまらない。限界だった。

「や、もう……っ」

「良いよ」

許しを告げる言葉に、抗う術などなかった。快樂を与える掌が決定的なそれを与える。人の手で迎える逐情に羞恥を感じる余裕すらなかった。けだるく、全身の力がぬけ、どうしていいのかもわからない。だから、彼の手が己の両足を開かせても、されるがままだった。

「……っ、ひあつ、や、……何、」

臨也の指が臀部に触れたかと思うと、やや強引に狭い入り口へと押し入ってくる。乾いた感触ではなく、濡れているのは自分の精液を指がまとっているからだ、と気がついて目眩がしそうになった。

「やめっ、……っひ、……」

自然、身体は逃げようとするけれど、それを許してくれる男ではなかった。そんな帝人の行動を罰するように、さらに本数を増やすと指を奥深くへと埋め込み、その味を帝人に覚え込ませていく。長く細い指は、ひたすらに器用だった。

「ああつ、——あ、んっ……!」

不意に訪れた、形容できない衝撃。それが快樂だと知るのはいくらか後の話だ。見つけた、と臨也が笑う。意味がわからず、ただ怖くて逃げたくなった。

「や、そこ、……や、です……っ」

必死で告げてみたが、臨也はわざとその部分ばかりを狙ってくる。その部分にあたえられる得も言われぬ感覚に惑い、喘ぐしかなかった。

——そうして。

指が引き抜かれて安堵するよりも物足りなさを覚える自分の身体に愕然とする間もなく、ひた、と熱い存在が押し当てられる。

舌で己の唇を舐める仕草をする臨也は、雄そのものの顔をしている。その欲情を隠さない表情を見て沸き上がるのは歓喜だ。嬉しい、と思った。彼が、自分に欲情する事実が、嬉しい。

(どう、しよう)

この人が、どうしても、どうしようもなく、好きだ。どうなっても良いと、そう思えるくらいに。怖さも痛みも、どうでも良いと思えるくらい、彼が好きだった。

「あ、……ああつ、——ひ、あ、あん……っ」

侵略する熱塊に、その衝撃にまた涙が流れる。拭われて、思わず微笑んだ。

「……っ、煽って、んの？」

尋ねる声音に、いつもの余裕の色は見えない。超えた得るだけの余裕があるはずもなく、その後はひたすらに揺さぶられ、貪られた。ただひたすらに、何度も、彼が満足を覚えるまで、ずっと。